

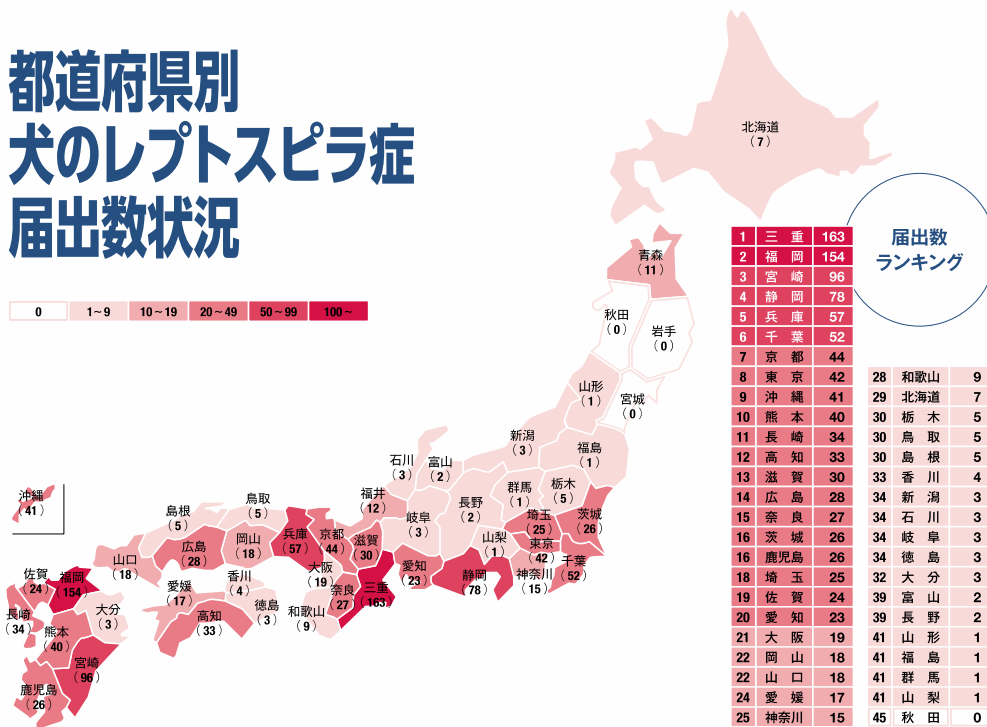
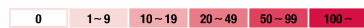
犬のレプトスピラ症について

近年日本国内でのレプトスピラ症の発生は、主に関東より西に集中していますが、2004年以降減少傾向にあります。神奈川県内では、2011年と2014年と2019年に1件ずつの届け出がありました。

また、2021年には、神奈川県内において市中感染と考えられる症例の届け出がありました。

そこで（公社）神奈川県獣医師会では、飼い主さんとその愛犬をレプトスピラ症から守るため、病気の説明と感染予防のための対応をご紹介します。

都道府県別 犬のレプトスピラ症 届出数状況



◆ 資料：農林水産省「届出伝染病の県別発生状況」
※ 平成10年～平成30年12月の累積

1. 感染症について

(原因菌)

レプトスピラ症は、病原性レプトスピラ感染によって引き起こされる、人獣共通の細菌（スピロヘータ）感染症の1つです。

レプトスピラ (*Leptospira*) には病原性と非病原性の2種類があり、現在 250 以上の血清型に分類されています。

人獣共通感染症は「ヒトと脊椎動物の間を自然に伝播しうるすべての病気または感染症」と定義されており、人にも動物にも共通して感染しますので、公衆衛生上注意が呼びかけられています。

国内では「人獣（畜）共通感染症」、「人と動物の共通感染症」、「動物由来感染症」と呼ばれています。



(感染動物)

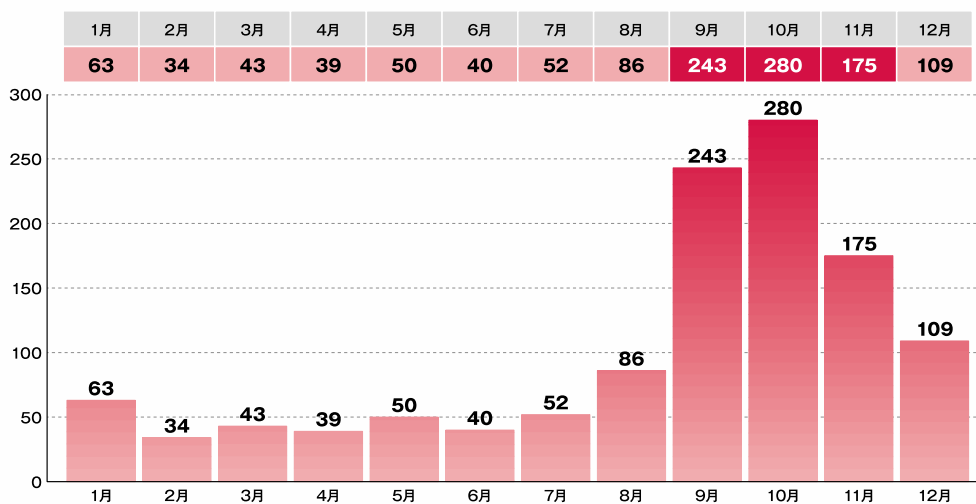
病原性レプトスピラはネズミ、イヌ、ウマ、ブタやコウモリ、タイワンリス、ハクビシン、タヌキなど多くの野生動物、全ての哺乳類に感染します。

(伝播)

病原性レプトスピラに感染し、保菌している動物が排泄する尿中に、病原菌が含まれます。尿中に排泄された病原菌を直接または間接的に取り込むことで感染が成立します。感染尿で汚染された淡水、湿った土壌などが主な感染源になります。病原菌の尿中における生存期間は短く、中性あるいは弱アルカリ性の淡水を好みますので、海水の中では生存できないと推測されます。また、乾燥にも弱いので海岸の砂の中でも生存できないと推測されます。また、レプトスピラ症の特徴として、外気温によっても病原菌の生存が左右されるため、一般的には秋をピークに感染の増減がみられます。古くから人が感染した場合にはこれを「秋疫」（あきやみ）、「七日熱」（なぬかやみ）などと呼ばれることもあります。

犬のレプトスピラ症 月別届出数状況

このデータは、あくまで届出があった数の累積です。
実際に発生していても届出がされていないケースは含まれません。
つまりこのデータは、犬レプトスピラ症の発生状況における
氷山の一角にすぎない、と考えられます。



◆資料：農林水産省「届出伝染病の県別発生状況」
※平成10年～平成30年12月 月別届出状況（累積）

(発病)

潜伏期間は、数日～14日程度です。十分な免疫を持たない個体や免疫力が低下した個体では、重症化しやすいといわれています。犬以外の野生動物においては、感染してもあまり重篤にならずに数ヶ月から一生菌を排出し続ける場合もあります。なお、屋外飼育の猫での発病はまれで、軽い症状で済むか、不顕性感染であることが多いと考えられています。

(症状)

一般的な症状は、発熱、食欲不振、元気消失、嘔吐、脱水。重篤な状態では、粘膜の潰瘍形成（歯茎、舌から出血・壊死）、粘膜充血、ぶどう膜炎、黄疸、腎機能不全、肝機能不全などを発症します。（ただし、他に原因がある場合もあるので、レプトスピラ症だけの特有症状ではありません。）

犬の場合は、他の動物より肝不全や腎不全が重度に起こりやすいといわれています。

(診断)

特殊な顕微鏡検査で確認することができることもありますが、不確実な場合が多いとされています。

抗体検査も有用ですが、レプトスピラ症を含むワクチン接種による抗体価の上昇と区別が付きません。ワクチン未接種の個体が感染した場合は、感染後1～3週間で抗体価が最大になるため、1週間以前の抗体検査では陰性となる場合があります。より確実な方法としては、遺伝子学検査（PCR検査）により感染を確定することが可能です。検体は、発症4日以内なら血液、それ以降は尿を用います。

(治療)

細菌感染による病気ですので、抗生物質の投与と体全体のバランスを維持する支持療法を行います。しかし、甚急性の肝不全や腎不全の発症では進行が早く、治療が間に合わず亡くなってしまう場合もあります。

2. 対策について

この感染症の情報に関して必要以上に神経質になってはいけません。多くの場合は、単発的であり感染拡大が進むことは稀であると考えられます。きちんとした管理と予防対策を行うことで十分に対応できることを先ず認識してください。

感染源がどこなのかを飼い主がその場で確認することは困難です。一般的に感染源として分かっているのは、汚染水（川・池）、土壌（山・キャンプ場）などです。特に、嵐や激しい雨が降った後には汚染されている土壌や水が流れ出て、感染源となっている場合がありますので、お散歩には注意が必要です。お散歩中に愛犬が色々な物を口にしないように、リードは短く持つことをお勧めします。

愛犬が散歩中に排泄をした場合には、しっかり流水（次亜塩素酸はより効果があります）にて処理をしましょう。合わせてきちんと手洗いを行いましょう。

海水中でレプトスピラは生存できません。また、乾燥した場所でも生存できませんので、海岸での感染は可能性が低いでしょう。不確定ではありますが、県内におけるタイワンリスなどの野生動物において、病原性レプトスピラの不顕性感染が蔓延している可能性があり、それらの動物の尿中排菌によって市中感染が起こっていることも示唆されます。

愛猫については、室内飼いを徹底してください。

3. 予防について

直接的な予防法としては、ワクチンが有用です。

すでにレプトスピラ症に対応している混合ワクチン（7種、8種、10種）やレプトスピラ症単独のワクチン（2種、4種）を接種しているワンちゃんに関しては、早急な問題はないと考えます。しかし、日本国内では14種類のレプトスピラ症病原菌型が報告されています。残念ながら全ての型を予防することはできません。

日本国内においてはレプトスピラ症の甚急型として報告のある、カニコーラ型とイクテロヘモラジー型が混合されたワクチンを、我々獣医師が提供可能です。

レプトスピラ症に対応していない6種以下の混合ワクチンを接種している場合などは、かかりつけの獣医師と相談して、予防注射のメリット・デメリット、抗体保持期間、費用など詳しい内容を含めた説明を受けた後に、追加接種を行うこともお勧めします。

なお、健康上の理由などにおいて、ワクチン接種困難な個体に関しては、上記の限りではありません。

(公社) 神奈川県獣医師会